

# 東南アジア華人社会の伝統芸能

——農暦七・八・九月の祭祀と地方劇——

尾上兼英

## 目次

- 一 調査目的
- 二 シンガポールの中元節(第八十二冊)
- 三 シンガポールの齊天大聖聖誕他
- 四 マレーシアの九皇爺法会(第八十三冊)
- 五 タイの徐氏宗祠他
- 六 補記(以上本号)

## 五 タイの徐氏宗祠他

### (一) タイの徐氏宗親総会

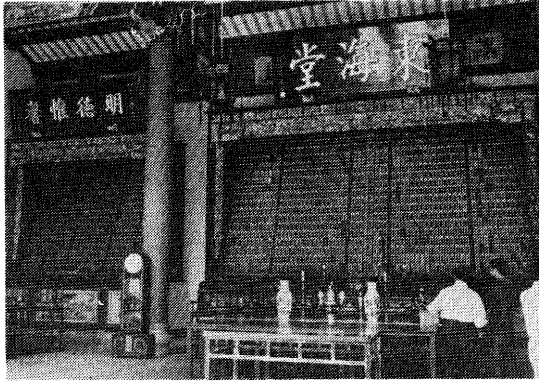
東南アジア華人社会の伝統芸能

まったく偶然にタイの徐名義氏と知人になった。今回の調査で宗祠が最も困難と思っていたので、幸運であった。「旅泰徐氏宗親總會」の記念特刊編集會議があり、編輯方針を決めるため幹部が集るといっているので、その日に案内してもらおう。バンコク側からクルンテープ橋でチャオプラヤ川を渡り、タークスイン通りをサムットソクラムの方向へ南下する。かなり郊外へ出たところで、いきなり通りに面して徐氏宗祠の「東海堂」があった。大門の内側に広い庭をもち正堂は三間からなり、正面の匾額は徐煥章筆の「東海堂」、この正面に先祖の神位があつて左右に古い一族、

左は「明德惟馨」右には「慎終追遠」の匾額があり、近い先祖の神位が並べ祀られている。正面は各房祖十七とその他約八〇〇、左は約五六〇、右は約六〇〇あり、タイ在住の徐氏を網羅しているのである。

「旅泰徐氏宗親總會」は、一九六四年九月一日に徐啓山を総幹事として設立された。軟橋萱鑾嚙叻の斜対面の新築二間の塗庫、門牌九六から九八が会址である。十月二十四日に内装が完成したので孔堤から移転した。十月十九日に来賓と内地各聯絡処からの代表が集り、京南警総巡提拉汝少将によってテープ・カットが行われ、新会址落成祝賀会が行われた。

翌年六月六日建祠準備委員会が設けられ、一九六九年現在地に新築された。材料は瓦に至るまですべて大陸から運んできた。その後毎年十二月十八日に会員大会と宗親懇親会を開き、潮劇団（青囊玉楼春班）に助興演出をさせる。劇団は長期契約で、毎年変ることはない。劇団を招くのはこの



旅泰徐氏東海堂正廳

時だけで、年に一回であるという。

いずれの氏も、先祖は中国の開闢に求めているが、徐氏の場合も、禹の治水に協力した虞官の伯益を先祖とする。伯益の子若木を夏は徐（徐城県は山東省の南部）に封じたので、これを氏とした。降って周の穆王は犬戎の討伐、八匹の駿馬を得て西土漫遊などの浪費により、人心は穆王を離れて同時代の徐偃王に集り、偃王の勢力は東海に及んだ。徐氏が祠堂に「東海堂」と命名するのは、これに由来するのである。徐氏宗祠に徐偃王の肖像画が掲げてあったが、直接の始祖として尊崇しているのである。



波田須の徐福の墓

秦の始皇帝の命令をうけ、百人の童男童女をひきつれて日本へ渡った徐福も、徐氏古代の英傑の一人であり、日本の「熊野県」に上陸したという。確かに熊野に徐福の墓があり、近隣の人々によって保存されているが、話の合間に日本人は神武天皇か臣下の子孫であろうというので肯定したところ、香港の衛挺生教授なる人に、神武天皇は徐福であるという著書があるので、従って「君は我が一族である」ということになった。このことによって親近感を示されたのは、妙な成りゆきである。

その上、「日本人第二次南進的時期、我住在泰

國、泰國小、賊心大」という。この文脈は後者の「泰國」は日本を指すのであろう。日本の技術の進歩を盛んに口にしたのも、精神の方は信じていないという意志表示と思われる（この場では、日本の高校教科書の「進出」「侵略」問題を出されなかった）。

伯益と徐福は体制協力者と反体制の士と見ているようで、協力者としての祖に、李世民を補佐した徐成、朱元璋を補佐した徐達をあげ、反体制派として、武則天に対する徐敬業、蒙古に抵抗した徐寿輝、反満の志士徐錫麟の名を挙げ、その両派に属さぬ隠士として、後漢の徐禪と明の徐祜をあげ、両派のバランスを保たせていた。なお徐禪は郭林宗によって「南州高士徐孺子」と称されたので、江南一帯の徐氏は堂名を「高士堂」とするという。

学者では「易」を伝えた漢の徐宣、徐憲、徐防の祖孫三代、北宋の「説文」学の徐鉉、徐鍇兄弟、西学に通じた明の徐光啓、医学では唐の徐大椿、画家では宋の徐熙と徐崇嗣。書家では清の徐枋。文学では前漢の徐樂、後漢建安七子の一人徐幹、南朝の徐陵、明は「吳中四才子」の一人徐禎卿、近くは徐志摩。旅行家に『徐霞客遊記』の徐宏祖。女流では漢代の徐淑、梁の元帝の寵妃であった徐妃と際限がない。歴代名人を祖にもつ（という）自負と尊崇の念の現われであろう。これらは会議の間に祠堂を参観しながら、管理者との間で話したことである。会議が終って徐名義氏に、直接の祖について質問した。

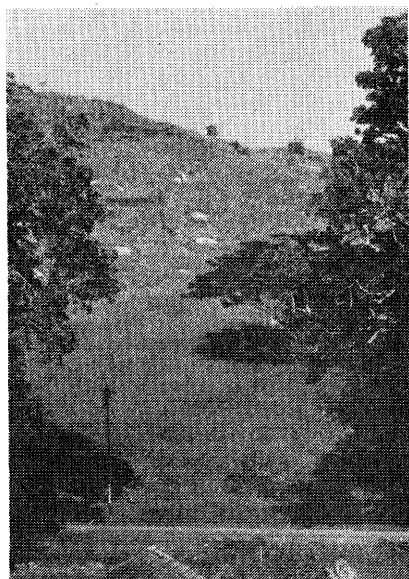
宋末に元軍が長江を渡って南下したので、江西の寧都から徐一郎は福建の上杭へ、弟の二郎は連城へ避難し、その子孫は、それぞれ長楽、帰善と豊順、湯坑、松源へ移住していったが、この二系統が閩・粵の徐氏の先祖であるという。徐一郎、二郎と徐姓の名士との関係ははっきりしないが、これが真相に近いのであろう。

徐氏宗親総会は、タイ国内各地に聯絡処をもっている。

(一)北柳(Chachoeng Sao) (二)彭世洛府(Phismuloke) (三)碧差汝府隆塞(Phetchaboon Lomsak) (四)宋加洛府(Songkhla) (五)程逸府(Uttaradi) (六)網帕府(七)難府(Nan) (八)南邦府(Lampang) (九)北欖坡(Samut Prakan) (一〇)披天府(Payas) (一一)昌堪(Chiang Kham) (一二)昌萊(Chiangrai) (一三)婁柿(Mae Sai) (一四)婁曾(一五)高頭廊(Phat Talung) (一六)合艾(Had Yai) (一七)呵叻府(Nakorn Rajsimma) (一八)網板(一九)昌盛(Chiang Saen) (二〇)昌孔(Chiang Khong) (二一)他驚(二二)星万(Thamuang) (二三)星娘(二四)港嘴(二五)万磅府(Banpong) (二六)呈堅(二七)碧差汝(Phetchaboon) (二八)素正泰府(Sukho Thai) (二九)帕色梗(Tabsakoe) (三〇)北柳酒廊(三一)清邁府(Chiang Mai) (三二)坤敬府(Khon Kaen) (三三)莫肯府(烏汶府(Ubonrajchathan) (三四)童頌府(Tung Song) (三五)統統府(Nakorn Pathom) (三六)挽武通(Bang Buathong) (三七)巴蜀桂武里(Prachabkhirikun)

籍貫は少数の福建、海南島、一人の泰籍を除いては、会員はすべて広東省出身であり、豊順県出身が圧倒的に多い。

徐名義氏も豊順県出身で十九歳まで大陸で育ち、タイへ移住した。ことばは客家語を常用するようである。もっとも、幹部と食事をした際、最初の話題提供者が広東語で話せば、全員広東語で応じ、客家語の場合も同様であった。徐氏は広東人で構成されているが、母親は、客家、潮州、閩南、海南島の場合があり、幼年時代は母親のことばで育ち、仲間の会話もまじまじのことばを使うので、どれにも精通しているとのことである。現在の悩みは「現泰國政府不許可讀華文、一般華僑子弟不識華文、他讀泰文」という状態で、若い世代が中国離れることにあるという。タイのタイ同化政策が、中国系タイ人の同化に成功しているともいえる。彼らはほとんどタイ氏名をもっており、公式にはタイ名、私的には中国名を使っているようである。会館へ行けば、いずれも中国名を常用しているが、名刺にはタイ名併記の場合が多い。



宝山亭より見た三保山

ロほど離れた所へ墓地を建設している。中国人にとって墓地のもつ意味は大きい。マラッカ、シンガポール開拓の際も、まず墓地を確保し、船員や労働者に死後の安住の地を保障して、入港する船から一種の税金を徴収した。

マラッカの埋立てに中国人墓地である三保山を取りくずす政府決定が、一九八四年の調査時期になされ、中国系マレーシア人の憤激を買って政治問題化していたが、逆にタイ人は墓地をもたぬようで、タイ名を名乗っていても、墓地の有無で中国人が識別できることを発見した。すべてのケースに当てはまるか否かは、今後の課題であるが、)

徐氏宗親総会は、(一)福利部、(二)康楽部、(三)会員部、(四)文教部、(五)調解部に分けて活動している。

会員部 会費の徴収と会員の動静の把握・連絡。

福利部 会員の災害援助、慶事、喪礼、建設と職業紹介等。

(この悩みを小説にしたのが、『タイからの手紙』である。タイで生れ、タイ語で育った子供に、まだ見ぬ祖国を自覚させるのは困難とみえ、二世、三世と代を重ねると、アイデンティティが失われるようである。宗祠、会館のもつ比重が、シンガポール、マレーシアと比較して大きいと思われる。その最大が墓地問題であろう。トングリ王朝時代にバンコク側に作られていた墓地の移転が、現在課題になっているようである。移葬には会館が援助し、困難な人には融資をしてバンコクから一〇〇キ

文教部 学校経営、子女の文化水準向上、奨学金の募集、貧困子女の成績優良者援助。

康楽部 娯楽と体育の二組に分け、国楽、歌唱、戯劇、球隊等の奨励。

調解部 会員相互あるいは会員外との紛争の調停。

以上五部の内、最も力を入れているのが福利事業で、典札と建設の二組を置き、財源は、(一)会費の福利金、(二)宗親特別楽助金、(三)会員の慶弔楽助金、(四)遊芸主催収益金に求め、典札組は、(一)会員及び家族の喪儀費用の援助。(二)会員の慶事への祝儀。(三)紛争時の調停(調解部業務が福利細則中にも含まれている。あるいは事件の大小、会員内外で分けるのかもしれない)、(四)会員が出国する際必要な会員証明書の発行、あるいはパスポートの申請、出国手続代行。(五)老齢で家族のない場合の援助。(六)失業した際の就職斡旋。建設組は、宗祠、山莊(墓地)、学校、病院等の慈善事業に対する援助をすると、「章程」「細則」「実施細則」をとくに定めている。

徐氏宗親總會は、会員のほとんどが広東省出身ということもあって、主要な職業は製造業であり、最も盛んなのは紡績業であるという。それに附随する染色、既製服、男女下着。金属関係で鍍金、窓枠サッシ、食器、バケツ、自動車部品。家具。皮革製品などで、商店、貿易業は少ないということであった。

旅泰徐氏宗親總會は、榮譽会員四七人、永遠会員四二五人、普通会员七四〇人、合せて一、二二二人(一九六五年現在)の比較的小組織である上、出身地も限られ創設して日も浅いので、他の徐氏宗親会との連繫も進んでいないとのことであり、会の成立時には、香港徐氏宗親会とのみ連絡がとれたという。

香港徐氏宗親会は一九五九年五月に設立準備会が作られ、翌六〇年十一月二十九日に香港政庁の批准を得、六一年三月十五日に春節の懇親会を兼ねて第一回の会員募集總會を開き、十月二十九日に選挙委員会を設け、十二月九日に開票

して、理事、監事を選出し会章を定めて発足した。十二月十六日互選によって会長、副会長、理事長、副理事長、総務、財務、文教、福利、交際、婦女、秘書、理事、監事長、副監事長、監事、監察、稽核、顧問等の分担者を定め、六二年二月二四日に設立総会・盛大な祝宴を開き、参加会員数は六〇〇名を越えた。六三年五月二日に波斯富街 (Percival St.) の宝明大廈九樓に永久会所を購入し、六五年二月から本格的な会務活動を開始した。現在相互に連絡をとり交流しているという。

(二) ペナンの王氏太原堂

ペナン島のペナン・ロードに、規模の大きい太原王氏の祖廟がある。王氏はペナン開拓の福建四姓（邱氏、陳氏、謝氏、楊氏）広東一姓（林氏）には含まれないが、太原の王氏といえは唐の五姓の一で、名門である。折から大学卒業の一族の子弟を迎えて奠礼を行っていたので参観した。

現在の宗祠は、光緒二十一年（一八九五）王漢鼎・漢宗・漢寿三兄弟の提唱でまず正堂の創建が計画され、本国から材料と建築家が招かれて光緒二十六年（一九〇〇）に完成し、会館としての活動を開始した。一九一六年改修を行った際左翼の棟を。一九五一年の改修で右翼の棟と周囲の牆壁を作り、廟前の広場の整備が行われ、現在の偉容を誇るようになった。正堂の神龕には開祖の神位が祀られ、左右の両龕にも祖宗の神位が祀られているが、その数はタイの徐氏「東海堂」に比べて遙かに少い。

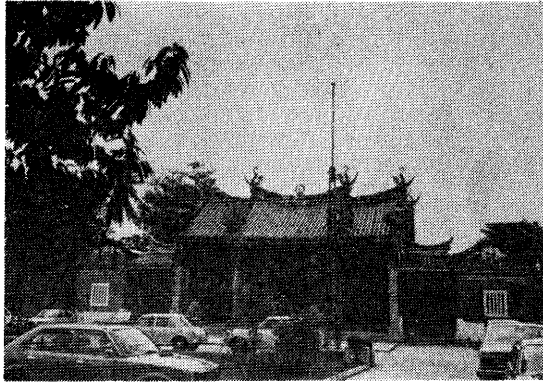
始祖を黄帝とするのは漢民族の常であるが、軒轅から姫姓、姫姓から出た周の太子晋（前五六五—前五四九）の独子宗敬が、致仕の後太原に隠棲し、姫姓を捨てて王姓を名のり「王者の子孫」であることを示した。これを太原王氏



の開祖とするが、父の晋が夭折したのを悼み尊んで晋を始祖の位置に据えている。一部の王氏では、晋の字が子喬なので仙人の王子喬を祖とするものがあるが、これは訛伝であるという。

王氏は太原、瑯琊、北海、陳留、東海、高平、京兆、天水、東平、新蔡、新野、山陽、中山、章武、東萊、河東、金城、広漢、長沙、堂邑、河南の二十一の地域にわたるが（『広韻』）、太原が最大であり、魏晋六朝時代にはすでに謝氏と併称されるに至った。この太原の王氏の二世王元が戦乱を避けて山東の瑯琊に移住して瑯琊の王氏の祖となり、三三世王導が晋の元帝を補佐して宰相となり金陵の王氏の祖となり、四十一世王褒は梁の元帝を助けて江陵に西魏軍を迎撃したが、元帝が降服したので咸陽に逃れ、咸陽王氏の祖となった。四十五世王暉は唐の光州固始県令となり、任期を終えても民衆の懇望により定住し、固始王氏の祖となった。四十九世王潮は固始県佐であったが、黄巢の乱に際会するや、軍を率いて奮戦し潯陽、贛水、汀州、漳州、泉州、福州など転戦しながら八閩を制圧し、威武軍節度使、檢校尚書左僕射に任命された。潮には弟があり、二弟審邽は泉州刺史、三弟の審知は潮の副使となり、潮の歿後、後継者となった。この三兄弟を開閩王氏の開祖とする。

潮の子延望は汀州刺史、延釭は漳州刺史、審邽の子延彬は泉州刺史、延美は漳州刺史、審知の子延稟は建州刺史、延均は泉州刺史、延政は建州刺史となつて閩地域に勢力を扶植したが、南唐によって制圧された。三世、



横城王氏太原堂

四世までは官途についた者もあるが、その後は江西省、浙江省、福建省、広東省の各地へ分散移住をした。

潮州王氏の始祖は、審知四世の孫王坦である。泉州から潮州に居を移し、子孫に莆田、漳浦、黃岡、普寧、揭陽に移住するものもあった。

東莞の王氏は審知十五世の孫に当る王泰（原名傑）である。莆田系の王氏で、宋の宣和年間に進士に合格、広東の官につきそのまま広東に居住した。

琼崖（海南島）の王氏は太原の王氏である。開祖王悦は開封出身で南宋の進士、龍関閣直学士に至ったが左遷されて莆田の県令、ついで琼州府同知護理太守となり、金軍の南下を避けてここに定住した。

金門の王氏 二十村余に分郷居住し、集中しているのは四村である。山后（郷）の王氏は審知八世の孫王璠が宋末に移住し開拓した。珩厝（郷）の王氏は審知七世の孫、王四郎の支派の王煥三が、洪武年間に晋江から移住した。何厝（郷）の王氏も審知の子孫で、明の中葉に同安県から移住してきた。また金門城の王氏は審知十八世の孫が、明の洪武十七年（一三八四）従軍して渡来し定住したものである。その三世、四世で福州、潮州へ、四世、五世の一部で廈門、同安へ移住したものである。

台湾王氏 台湾の王氏は約七〇万余、台湾で第六番目に多い姓である。そのため系譜を辿ることが困難で、籍貫によれば泉州府、晋江、南安、惠安、安溪、同安の五県。漳州府、龍溪、漳浦、南靖、長泰、平和、詔安、海澄の七県。嘉応州、梅県、興寧の客家。他に汀州、福州、永春、龍巖、興化、惠州、潮州の七州府に及び、入植時期のわかるものもある。

これらの各地王氏の内、東莞の王氏は香港「香港東莞王氏宗親会」「香港東莞王永思堂宗親会」とタイに地歩を築

いている（バンコクに王晋卿の設立した「広肇別墅」の学校、病院等の福利事業は有名である）。

琼崖の王氏は開閩王の後裔ではないが、タイ、シンガポール、マレーシアに移住したものが多く、

金門の王氏から分れた同安の王氏は、清末にインドネシア、シンガポール、マレーシアに移住したものが多く、

以上のルーツを辿れる王氏からみると、ベナンの太原王氏「開閩王」の末裔の系譜は、金門の王氏の支派かと思われるが判然としない。一九八〇年の職員名簿によると、その籍貫は名誉家長、正主席以下協理まで三十四人の中、福建省は同安十一、惠安十一、南安三、晋江二、安溪一、福清一。広東省は普寧二、潮安一、文昌一、揭陽一で、職業は商業二五、建築業四、公務員（退休を含む）二、会計師一、薬剤師一、書記一となっており、同安、惠安出身者が多いこと、商業に従事するものが多いこと、言語は閩南系の特色をもつ。

活動は、他の宗親会と同様、春秋の二祭、親睦の宴会、紛争の解決、災害の救済、慶弔の援助、各地の王氏宗親会との連繫・親善訪問などの一般活動の他に、「助学基金委員会」を設け、一九七一年以来、宗親の子弟に奨学金を授与し、卒業生を集めて盛大な祝賀会を行っている。

また別に福利事業のために、一九二八年に設立した「檳城王氏一心社」があり、地方の平穩維持と会員の福利事業を行っている。調査時点（一九八二）では「王氏太原堂」の正家長である王金生氏が主席となり、非会員の「養生送死」にも協力しているという。非会員の定義を聞きもしたが、入会していない王氏であろうと思われる。王金生氏の原籍は同安で、審知公十一世の孫王暹郎の末裔というが、審知公世系には暹郎以下は記載がなく、泉州から渡来したという。御本人はベナン生れ、クアラ・ルンプル、イポー、クチン、シンガポール、香港に支店をもち手広く商業活動をしている。同社は始め過港仔直街（六條路口）に会所を置き、戒闘に至らぬまでも紛争が多いので、治安維持

に重点をおいて活動し、五條路 (Leboh Macallum)、本頭公巷五條路、七條路 (Leboh Cecil)「泉興公司」など転々としたが、紛争が減少して活動がにぶつたので、固有の会所を作り現在では会務も順調に行われているという。名譽主席には、独立後第一回民選で檳城州主席部長となり、その後駐イタリヤ大使となり、丹斯里 (Tan Sri) の榮譽に輝く王保尼氏 (原籍惠州)、「王氏太原堂」名譽家長王振喜氏 (原籍福清)らが就任し、実働部隊という印象をうける。職員は「王氏太原堂」と一部重複するが、恵安出身者が主力となっている。

(三) シンガポールの開闢王氏總會 他

もとは「星州閩王祠總會」といったが、一八七二年に同安出身の豪族王友海が、同郷の商人王求和、王宗周と相談して大巴窰上段 (Toa Payoh rise) に三二一エーカー余の土地を購入、「福建王氏慈善開闢公司」の所有とし、福建の王氏ならば、家屋の建築、耕作、死者埋葬にあててよいこととし、「姓王山」と名づけた。現在の武吉智馬律四英里 (Bukit Timah Rd. 4m. p.) の謙福律 (Kheam Hook Rd.) の華人墓地である。一八七五年に祠堂を建築して祖宗を崇拜し、同族の精神的な団結を強めようとし、王友海は福州へ出かけて慶城寺街の「忠懿王祠」に詣り (一九八六年に福州へ行った時に参観を希望したが開扉時間に間に合わず、見られなかった。唐、宋の石碑が残っているという)、祖王祖婆の神龕と開闢王の肖像画を持ち返り、珍珠街 (Chin Chew St.) に「閩王祠」を設けた。二階には黄帝、太原王氏始祖の晋の肖像画、一階には持ち返った神龕と開闢始祖三兄弟の肖像画を飾り、春秋二祭には、檳城王氏太原堂から贈られた四幅の「開闢史画」も飾ったという。正面入口の上には晩清の状元王仁堪の筆になる「閩王祠」の匾額が、一九七九年の予備調査の際は見られたが、珍珠街はシンガポール再開発のため破壊されてしまった。

「閩王祠」が建築されると「閩王祠總會」が設立され、炉主制が採用された。主たる活動は、やはり春秋二祭、親睦会、紛争解決、災害救援、慶弔援助であるが、同族の結束が主目的である。日本軍の占領下では活動は停止したが、戦争末期に華人社団の復活の機運をうけ、「閩王祠總會」も活動を再開し、炉主制を改めて委員制とし民主化に努めた。会の名称も神廟の結社という誤解を招くので、政府登録名称 Singapore Hokkien Ong Clansmen General Association にあわせて「新加坡開閩王氏總會」と華文名も改めたという。

シンガポールには王氏の宗親会が他に二箇所ある。

#### 新加坡江兜王氏公会

福建省の南安にいた王氏が、明の嘉靖末泉州がしばしば盗賊に襲われるので、万暦元年（一七五三）に一族をひきつれて福清県の韶溪江皋へ移住した。移住先の江兜は王氏一姓村であったが、土地は瘠せ水利も悪かったので海外へ出る者が多く、肉体労働者として、シンガポール、マレーシア、インドへと移住した。百年後の今日では、各地の江兜王氏は一人に達し、自転車、電池、紡績などの工業、タクシー、バス会社などのサーヴィス業、金融や建築業、ゴム、パーム・オイル、錫、米等の一次産業などの各方面で成功を収め、とくに自動車部品はシンガポールで最初に手がけたという。福清への移住の祖王誠・嚴清公から五代目に十五字の聯を作り、子供に命名した。

希孔孟学常志聖賢顯祖榮宗明世徳

述堯舜道惟存孝悌振声紹武裕孫謀

右の聯は幼児の「学名」、左の聯は成年になると「字」にあててきたが、現在の人は一人二名称の習慣をもたない

ので、左右いずれでもよいことになっている。現在は「声」「紹」の世代になっているが、左右いずれの文字でもよいので世代がすぐに辨別できる。会址は惹蘭勿刹 (Jin Besar)、義盛有限公司の四階にある。

## 新加坡卓岐王氏同郷会

卓岐郷は福建省海澄県に属し、北は海を隔てて金門島、西は川を隔てて廈門、南は太武山で六〇〇戸の寒村であり、郷里で生計をたてるのが困難であったため、廈門、台湾、シンガポール、マレーシアの各地に出かせぎをしていたが、そのまま現地に着するものもあり、郷親組織をもたねば對抗できない情勢であったので「岐合和」を結成した。対内的には「岐見を化して合和」、対外的には「合力移山倒海、和氣待人」の意味を付した命名で、族人の福利と紛争解決を目的とした。当初は丹戎禺路 (Tanjong Rhu Rd.) の加冷河畔 (Geylang River) におり、加冷飛行場が建設されると小坡仏礼沙街 (Fraser St.) に移住した。卓岐王氏は移住後一〇〇年以上になるといだが、シンガポールには一、〇〇〇人余りで小勢力のためであろうか、居住地は劣悪な条件の処である。大坡とよばれるシンガポール河を挟んで西岸の一等地には進出できなかったようである。一九四六年マラヤ聯邦が独立した時に、すべての社団の登記が必要となったので「卓岐王氏同郷会」と改名し、四七年二月十五日正式に仏礼沙街門牌七〇に創立した。

この経過からもわかるように、初期の同郷人の結束と外侮を防ぐ任意団体が、成功者の寄金によって実力を蓄え、やがてすべての同族結集にむかうのが、宗親会成立の経過とみることができる。

卓岐王氏は言い伝えによると、渡海の途中で嵐に遭遇し、「五頭大帝」を載せた船のみ無事到着したので、郷親の信仰が厚く、現在でも農曆十月十三日、十四日に五頭大帝の聖誕を祝い酬神戯を奉納するという。シンガポールには多い閩南劇団 (歌仔戯) の上演であろう。

#### (四) マラッカの植槐堂王氏宗祠

開闢王氏の末裔によって光緒七年（一八八一年）に宗祠を創建することが提唱され、三宝（保）井山の一角に開闢王陵がまず作られ、光緒二十二年（一八九六）マラッカの南馬九号に祖祠が寄贈され、「植槐堂」と命名された。第二次大戦で一族から十一人の犠牲者が出、日本軍の敗退まで活動を停止したが戦後に復興した。一九三〇年代までは会費が高く、閉鎖主義であったため族人の結集が妨げられたが、財政基礎が固まり章程を作って族門に開放したので、ようやく隆盛になった。

祠堂には三間の神位壇があり、春秋年節に祭祀が行われ、族長以下の団結がはかられている。籍貫は福建省の南東部、安溪、永春、廈門、金門、龍溪、惠安、同安、広東省の琼州、潮安で、閩南系によって占められている。

#### (五) クアラ・ルンブルの雪蘭莪王氏公会

惹蘭怡保吉集 (Jln Ipoh Kechid) に四階建のビルがあって、それが「雪蘭莪王氏公会」である。正廳に祖宗の神位があるが、二〇余りで少ない。一九六三年春、セランゴール州に王氏族会がないわけにはいかぬと、三十数年前の提案がむし返され、十月十二日発起人大会が開かれ、六四年六月二四日登記が完了し発足した。一九七〇年に会所が落成し、建物が賃貸されることで財政的基礎ができたという。

会務活動は他と変らないが、福利と奨学貸与金に力を入れているようである。会の職員の原籍は福建南東部が多いが、「新加坡開闢王氏總會」名誉会長や「雪蘭莪琼海同郷会」「雪蘭莪琼州会館」などの役員を兼ねる人が多いので、

同郷会の活動が優先したために、設立後、日の浅い宗親会となったのであろう。

(六) セレンバンの森美蘭王氏公会

一九七一年に発起されて七三年に登記が完了し、七七年に会所が創建された新しい公会である。会所は森美蘭芙蓉坡林木街 (Jln Limbok, Seremban) にある二階建のやや覚束ない感じの建物であるが、内装も含めて十二万リンギット (約一、〇〇〇万円) を要したという。その時の会員数が八〇名、現在 (一九八二年) で約一五〇名。落成の日には紫竹観音亭の高僧を招き、閔帝を主神、福德正神を安置して開所式を行ったという。普通会员は年五リンギットを納めることが、社団登記規定によって定められており、二一歳に達すると入会資格ができるのは他の社団と異なるという。人数が少ないので、家族単位ではなく個人を対象にしているというのであろう。セレンバンは一周一時間あれば、一通り見てしまう程度の町なので苦心が存するようである。

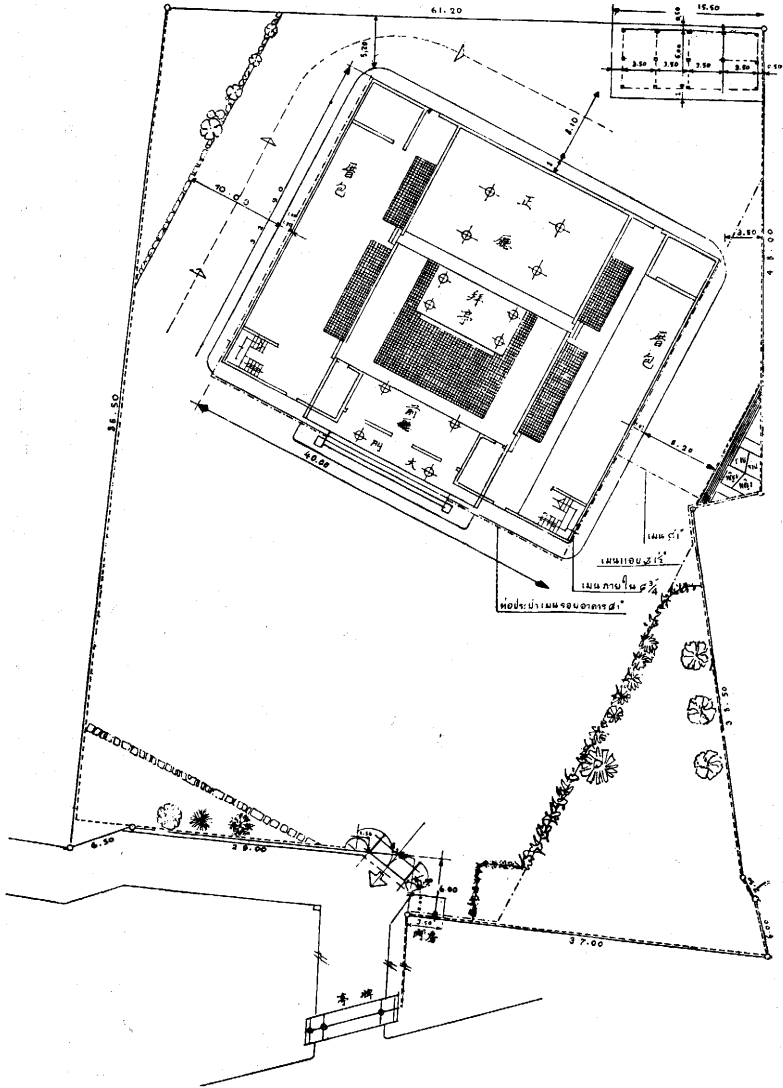
(七) タイピンの北霹靂王氏太原堂

タイピンはマレーシアで唯一中国名の町である。広東幫と福建幫が錫鉱山の權益をめぐって対立していた時に、偶然のトラブルから両幫あがての戒闘となり、多数の死傷者を出した。結局相方の和解が成立し、「太平」と命名されたという。従って歴史は古く、光緒二十七年 (一九〇一) に王垂梅の提唱で六エーカーの土地を入手し、一九一〇年に「王氏太原堂」が創建されたが、一七年に改築して「太平北霹靂王氏太原堂」と改名した。会址は哈夷甘光 (Haji Kampong, Taiping) であり、一七年～二〇年までは農曆八月十八日の祖王聖誕に大親睦会を開き、潮劇を招いて酬神



# 泰國王氏大宗祠平面圖

東南アジア華人社会の伝統芸能



戲をしていた。二〇年に正式に政府へ登記申請を行い、章程を定め理事会をおいた。族人の福利に主眼をおいて活躍している。職員の原籍はやはり福建南東部が多いが、広東省広州增城縣を原籍とする人がいる。その人は光緒十五年（一八八九）の怡保生れなので、両幫の戒闘に父あるいは祖父は遭遇しているが、タイピンで旧怨を捨てたということであろうか。

宗祠はバンコク、ペナン、タイピンなどは独立した宗廟建築である。泰国王氏宗親總會の大宗祠は内部を見ていないが、壮大なものである。シンガポール、香港、マラッカ、クアラ・ルンプル、セレンバンは近代建築で、とくに意味があるとは思わないが、棟の反りで一見して福建系、広東系の辨別ができる便宜がない。

## 六 補 記

芸能と宗祠の関係調査のためタイでは徐氏、他の地域は王氏の宗祠を対象にしたが、世代の若返りとともに芸能との関係は薄れている。酬神戲を必要としないためであろうか。ペナンの邱氏、マラッカの青雲亭は規模の大きい戯台をもっているが、慰霊のための演劇奉納も失われているようである。また宗祠建設が比較的日子が浅いのも、同郷會館が先行したためであろう。

附録として第八十三冊に名を出した Penang Gazette (Sunday 4th August, 1867) の全文を収録した。記載は二ページにわたるので、図1、図2 (A?) で記事の位置を示した。また第八十三冊の一五ページ一四行目の「宝福社は

前者の司令部」は「後者」の誤りなので訂正する。なお一六ページの図は正確でないと田仲一成教授から指摘があったので、改めて収載した。

本報告は文部省科学研究費海外学術調査の一九七九年の予備調査、八〇年の香港調査、八二年のシンガポール、マレーシア、八四年のタイ、マレーシアの本調査によるものである。

図 2 G

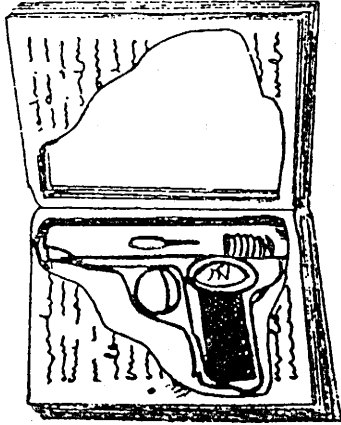
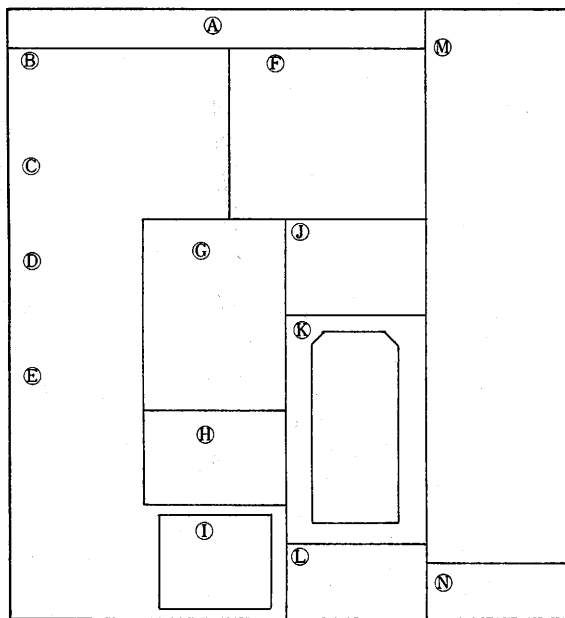


図 2 H





- |   |  |
|---|--|
| Ⓐ SECRET SOCIETY<br>WARFARE   | Ⓒ IDENTIFICATION<br>PARADE   |
| Ⓑ SCENE OF FIGHTING   | Ⓓ Rewards For Heads !!   |
| Ⓒ PERPLEXED LIEUTENANT<br>GOVERNOR  | Ⓔ 兵士の写真(小銃を持っている)<br>る) (略)  |
| Ⓓ DIFFICULTIES  | Ⓕ Safe Hiding Place  |
| Ⓔ RELATIVE STRENGTH   | Ⓖ RECEIPT FOR ENTRANCE<br>FEE の図                                   |
| Ⓕ MAP OF THE FOREIGN<br>QUARTERS IN<br>GEORGE-TOWN, PENANG,<br>SHOWING THE AREAS<br>WHERE FIGHTING IS<br>TAKING PLACE | Ⓗ Footnotes on the Peceipt   |
|   | Ⓜ INTERESTING OATH<br>CEREMONY GIVEN BY<br>WITNESSES<br>(GHEE HIN) |
|   | Ⓝ ROBBERY  |

④ SECRET SOCIETY WARFARE

⑤ SCENE OF FIGHTING

Penang, August 3rd-8 o'clock this morning marked the outbreak of heavy fighting between two rival secret societies-the Toh-Peh-Kong and Red Flag Societies, and the Ghee Hin and White Flag Societies. Reinforcements from their supporters came steadily from Province Wellesley and Puket in South Thailand. The Ghee Hins have their stronghold at Chulia Street, while the Toh-Peh-Kongs come mainly from Beach Street. Barely 100 yards separate the two rival societies. Main centres of fighting in Georgetown include Beach Street-Chulia Street junction, Ujong Pasir, Prangin Road, Acheen Street and Armenian Street, where the Toh-Peh-Kongs, Ghee Hins, Red Flags and White Flags have their headquarters.

The riot was a horrible scene of slaughter and violence. Every conceivable kind of weapon, from sticks and stones, to muskets and cannon, were used. Bullets, cannonballs, petards whizzed about in all directions, killing scores of secret society members. These members are tough people, fierce shrieks for blood and vengeance poured from their lips. Sweat gleamed on their faces caked with dust, and on their brown bodies as they faced their antagonists. Their voices rose above the thundering of guns, blazing muskets, and booming cannon. Some men, braver than others attempted to charge the rival camp, only to drop onto the road, as bullets struck them.

⑥ PERPLEXED LIEUTENANT GOVERNOR

The fighting continued for the next few hours, disrupting the peace of Penang. Meanwhile, the Lieutenant Governor of Penang, Achibald E. H. Anson, on receiving news of the street-fighting, immediately erected barricades of carts, timber and any available material, at strategic points, to prevent one of the opposition parties from making attacks upon the other in that area. These barricades are

being defended by sepoy and special constables.

Colonel Anson who arrived to take over the Penang Government as Lieutenant-Governor only in June this year, a few weeks before the riot. He has contested his perplexity over the present crisis facing him and the maze of Malay, Chinese and Hindu names which were brought to his attention.

### ① DIFFICULTIES

Rumours that the Chinese have threatened to blow up the civil powder magazine and are propounding to attack some public buildings, have reached the Lieutenant-Governor. More armed volunteers and police will be needed to defend these places. As it is, the police and military forces in Penang are inadequate, consisting of only 500 riflemen and 40 gunners; after the deployment of some to the Nicobar Islands, only 170 are now left. The insufficient troops to deal with the riot, have added to the Lieutenant-Governor's difficulties. Thus, he has been compelled to withdraw all of the police and military garrisons from the outlying country areas, and to concentrate all of his small battalion, including every able bodied European and Eurasian residents in the region around the lower part of Beach Street and the streets leading to it.

### ② RELATIVE STRENGTH

The Red Flag Society of Malays, allying with the Toh-Peh-Kong Society, make their total strength 7,500. The Ghee Hin Society and their supporters, the White Flag Society, consisting mainly of Malays total 28,000. Clearly, the force of Lieutenant-Governor Anson can never control 35,000 riotous men.

The Toh-Peh-Kong and Red Flag Faction consisting of 7,500 members, is comparatively small but they have the advantage of more firearms and such like equipment, these being supplied by firearm dealers of Penang, who are, most of them, Toh-Peh-Kong members.

The clash today will apparently be the signal for inevitable

violence and fighting to break out in Jelutong, Tanjong Tokong, Balik Pulau, Sungei Nibong and Batu Lanchang, since members of the combating secret societies live in open hostility in these small rural villages. The heavy fighting and inimical behaviour towards each society, show that the riot will not stop for some time to come, unless Lieutenant-Governor Anson receives reinforcements soon, or unless he is able to come to terms with the societies and negotiate a peace.

(For an account of the causes of the riot, see Editorial, page. 2)

### ③ IDENTIFICATION PARADE

Toh-Peh-Kong Society-group of Chinese of the Hokkien and Hakka dialects. Small collection of members, prominent and prosperous, monopolizing the firearms trade and opium trade. Headquarters of the society is in Canon Square. Khoo Thian Teik is the boss of the Toh-Peh-Kong. His residence is in Beach Street.

Ghee Hin Society-group of Chinese of the Cantonese dialect. Large society of the working class, working as pirates, fishermen and labourers. Its headquarters is situated in Church Street. The headman is Lee Coyn.

White Flag Society-allied with the Ghee Hin Society. It consists of Malay members living around the Hutton Lane area, Tanjong Tokong and Macalister Road. Its leader is Tuan Chee. Its major policy is for a member to help his neighbours in time of his neighbour's death if the deceased is a poor man and defray his funeral expenses. Should a member not attend, he would be mulcted in twice the amount of the share of the expenses. There name is derived from the white banner they carry.

Red Flag Society-another group of Malays teaming with the Toh-Peh-Kongs. The leader is Che Long and the area inhabited by the

Red Flag members is Acheen Street.

Ⓜ Rewards For Heads !!

When a Toh-Peh-Kong's head is taken, the executioner receives twelve dollars to twenty dollars head money. On the other hand, no reward is offered in the Toh-Peh-Kong Society for bringing any head of a Ghee Hin.

Ⓝ Safe Hiding Place

Leonard F. Fledges, sub-inspector of police, demanded to check the Toh-Peh-Kong Kongsis books from the secretary, Peng Kwa. Fledges was surprised to see him suspiciously drawing water cautiously from a well. He immediately investigated and found two old casks and a number of books secretly buried near the well.

Ⓞ Footnotes on the Receipt

This is a sample of a receipt issued to members of the Ghee Hin Society, Penang. Note the triangle in the lower section of the receipt. This is a symbol of the Triad Society, the parent body from which the Ghee Hin and the Hai San Societies originated.

Ⓟ INTERESTING OATH CEREMONY  
GIVEN BY WITNESSES  
(GHEE HIN)

When a new member joins the Ghee Hin Society he has to go through a traditional oath taking ceremony before being considered one of its members. Entrance fees of \$ 1.60 and \$ 3.60 are paid by a Kling (Indian) member and a Chinese member respectively.

The new member has to be taken into the Society Lodge, passing through four doors successively; certain questions will be asked and answered at each door where two guards are stationed. At the four doors the newcomer will be asked: —

Q. Where do you come from?



A. From the East.

Q. For what do you come here?

A. I come here to meet our brethren.

Q. If the brethren eat rice, mixed with sand, will you also eat it?

A. Yes, I will.

The door-keepers will then show a broad bladed sword and ask: —

Q. Do you know what this is?

A. A knife.

Q. What can it do?

A. With it we can fight our enemies or rivals.

Q. Is this knife stronger than your neck?

A. My neck is stronger.

The newcomer will be told what answers to make. After this he will be allowed to enter. The Secretary will then stand on a table with a man standing on the ground in front of him beside a tub of water. The newly enrolled member has to prick his third finger of the left hand with a needle and the blood that trickles is allowed to drop into the tub of water. After this the New member is made to pass under another and higher table, behind the one on which the Secretary stands, and upon which there is a joss stick; here a man will give the New member three cents.

On receiving the three cents, he will be told to go to a small charcoal fire at the back and step over it, the left foot first. Nearby there are three square blocks of granite on which he will be made to step with the left and right foot alternately. After passing these blocks, he will come to a man who keeps a kind of shop. The three cents have to be given to him in return for cigarettes, sired leaves and sweetmeats.

Then he will be led in front of the table with the joss stick on it. Then he will go to a back room, return to the table where the Secretary is standing dressed like a Chinese priest, and kneel down. The Secretary then reads from numerous folds of red paper for two hours. After the reading a fowl's head is cut off and the Secretary

burns the papers he has read. When the fowl's head is cut off the member is told he must come immediately when called by the Secretary, when he is asked to subscribe money he must do so. He must attend any marriage or funeral if called upon to do so. At any time his assistance is required he must go at once and when called upon to fight he must respond immediately. If he disobeys the above Rules he will meet the fate of the decapitated fowl.

Two months later he will receive a receipt for his entrance fee and a "Poonchee"-Ticket of Membership.

←(Sample of a ticket of membership shown by arrow)

㊦ ROBBERY

There was a robbery at Lorong Tahir to-day. Several members of the Ghee Hin Secret Society were robbed and badly beaten. Sticks and stones were used and the Ghee Hins were seriously injured. Masses of people came from the country provinces to help. The Ghee Hins were immediately taken to hospital.

圖1 ㊦

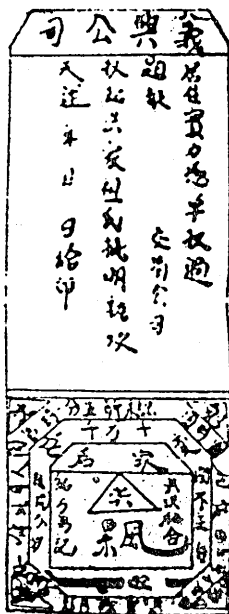
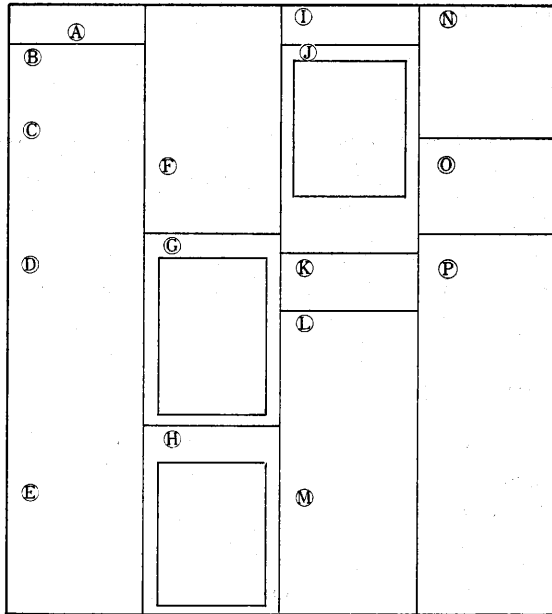


図 2



東南アジア華人社会の伝統芸能

- |  |  |
|--|--|
| <p>Ⓐ EDITORIAL</p> <p>Ⓑ OUTBREAK</p> <p>Ⓒ ORIGIN</p> <p>Ⓓ ROOT CAUSES OF RIOT</p> <p>Ⓔ IMMEDIATE CAUSES</p> <p>Ⓕ DEMAND FOR INQUIRY</p> <p>Ⓖ IS THIS A BOOK-WORM AT WORK?</p> <p>Ⓗ Kuan Kung, Chinese God of War Patron, Patron Diety of Chinese Secret Societies in</p> | <p>Malaya (including Penang)</p> <p>Ⓘ Plan of Ghee Hin</p> <p>Ⓙ SECRET SOCIETY HEADQUARTERS (図)</p> <p>Ⓚ STOP-PRESS!</p> <p>Ⓛ EXECUTION?</p> <p>Ⓜ Boom in Coffins</p> <p>Ⓝ Fiery "Reception" For Khoo</p> <p>Ⓞ PROCLAMATION (略)</p> <p>Ⓟ TRANSLATION</p> |
|--|--|

① EDITORIAL

② OUTBREAK

Yesterday's riot at 8 a. m. in the Armenian Street and Church Street areas certainly gives food for thought. This is not the first time such incidents have occurred in Penang, but yesterday's riot was by far the most serious because it involved the Malay Secret Societies-the Ghee Hin and Malay White Flag Societies against the Toh-Peh-Kong and Malay Red Flag Societies.

③ ORIGIN

All Chinese Secret Societies originated from the Triad Society (Heaven, Earth and Man) formed in the 18th Century with the political purpose of overthrowing the Manchu Rulers. In the 19th Century Chinese emigrants took with them their traditions and organizations of their societies wherever they settled overseas. Those in the southern provinces, lured by the prospects of tin and rubber, emigrated to Malaya with the earliest headquarters in Penang or Singapore. The emigrants spoke different dialects so rival groups flourished into "hoeys" or societies for mutual aid and protection. The Ghee Hin Society comprises of Cantonese and the Toh-Peh-Kong consists of Hokkiens and Hakkas.

The Red Flag and White Flag Societies were established as religious groups to assist its members in funerals, marriages, etc. Of late years the religious matters have been neglected and they have teamed up with the Chinese Secret Societies.

④ ROOT CAUSES OF RIOT

Through these years, secret societies have thrived and it seems strange that the Government has not realised the full consequences of such organizations. The lax attitude of the Government is partly responsible because no regulations have ever been passed proscribing

secret societies. The fact seems to point towards the inefficiency of the Government, its ignorance of the Chinese, their language, customs and organizations. The Governor Sir Harry Ord, and the Lieutenant Governor, Colonel Anson were only appointed on 1st April and 8th June of this year respectively. These men, so completely new to the colony, can not be expected to deal with local conditions suitably. The lack of an efficient police force, consisting of Indians, Sikhs and Malays with only one or two Chinese, is another factor which points to the inefficiency of the Government. We should have more Chinese policemen so that we will have some knowledge of what the Chinese Secret Societies are up to. That such a police force should be expected to maintain law and order in a country whose population is mostly Chinese is clearly an obvious point. This "couldn't care less" attitude of the Government can only lead to one result. Left to their own devices, the Chinese Secret Societies have built up their own system of mutual aid and protection with a strong hold over the Chinese population. They have developed into rival groups of extortionists and have become a public menace in open defiance of Government authority. Indeed, the frequent out-breaks of gang warfare, the strained relations of which can only be released through one outlet-riot, show only too clearly the failure of the Government in establishing a strong hand over its Chinese subjects.

#### ⑧ IMMEDIATE CAUSES

Yesterday's riot can be traced to the struggle for power between the Ghee Hins and Toh-Peh-Kongs. The aim of the Toh-Peh-Kong headman, Khoo Thian Teik, is to gain ascendancy over his rival, Lee Coyne, leader of the Ghee Hins.

The murder of a Red Flag diamond merchant after the Muharram (Muslim festival held annually) this year, caused conflict between the two Malay societies, which was taken up by their allied Chinese secret societies leading to assaults and quarrels.

In the beginning of July, a Toh-Peh-Kong Chinese was looking

into the compound of a Red Flag Malay through a fence, when the inhabitant insulted him by throwing a rambutan skin at him and calling him a thief. He retreated and returned with his cronies and a fight ensued until the Chinese were driven back to their Society Lodge where their sign-board was struck by a stone. The Toh-Peh-Kongs came out in force with firearms but the police intervened and a temporary truce was called.

But the final spark came when Khoo Thian Teik accused the Ghee Hin and White Flag Malays of stealing some cloth belonging to some Toh-Peh-Kong dyers. There seems to be no basis of truth in this charge and the suspicion is that the Toh-Peh-Kongs wish to use this as a "casus belli", since they have been preparing for a showdown with its rival. The assaults in several parts of the town have resulted in death and bloodshed.

#### Ⓕ DEMAND FOR INQUIRY

Now that this tragedy has happened, we demand that the Government should set up an enquiry without delay. It is the duty of the Government to do all in its power to safeguard the lives of its citizens by taking steps which will prevent a similar outbreak in the future.

#### Ⓖ IS THIS A BOOK-WORM AT WORK?

A hollowed out book becomes a highly effective method of concealing a pistol. The Toh-Peh-Kong Society uses this plan because a book is inconspicuous and portable.

Ⓕ Kuan Kung, Chinese God of War Patron, Patron Diety of Chinese Secret Societies in Malaya (including Penang)  
(He was a famous Chinese General who always won his wars.)

① Plan of Ghee Hin

#### Ⓖ-2 SECRET SOCIETY HEADQUARTERS

The Ghee Hin Headquarters in Church Street is a very enclosed

building such that once an enemy enters it he can never come out alive. He will be chased to a high-walled courtyard where he will be beheaded and his body thrown into a well. Note: the only entrance into the building is very narrow.

Ⓚ STOP-PRESS!

The report, made by Mr. Khoo Thian Teik, headman of the Toh-Peh-Kong Society, that the Ghee Hin Chinese stole some dyed cloth belonging to some members of his society as published previously, is now revealed as a trumped-up story.

Ⓛ EXECUTION?

A few convicts were besieged by a large group of Chinese near a saw-mill in Jelutong. The Chinese were Ghee Hins who mistook the convicts for members of the rival gang, the Toh-Peh-Kong. Hearing their shouts for help, Charles Edward Anderson ran to their assistance and warned the Ghee Hins that these convicts were Government men, and that they had better allow them to pass unmolested. The Ghee Hins after much discussion obeyed the order.

On reaching the saw-mill, after a thorough search, the Ghee Hins found five corpses believed to be the members of the rival Toh-Peh-Kongs. Three were headless and two severed heads were found, (one unrecognisable) alongside the bodies.

Ⓜ Boom in Coffins

There is now a big sale in coffins! After the warfare between the rival secret societies, the Ghee Hin and the Toh-Peh-Kong, reliable sources have revealed that many members have been fatally wounded. A Chinese carpenter (Ghee Hin) formally employed in the Convict Establishment led Charles Edward Anderson, overseer in the Convict Establishment, to the Kongs House in Church Street. On the lower floor, carpenters were busily constructing mass-produced coffins. Many

occupied coffins lined the front of Pitt Street Temple this evening.

㊸ Fiery "Reception"

For Khoo

Well known Toh-Peh-Kong leader Khoo Thian Teik, on his return from a kongsi meeting was greeted with showers of ashes, the remains of his house. It is estimated that about a few hundred dollars worth of property have been looted and destroyed. Several Malays were detained by the police.

㊹ PROCLAMATION

㊺ TRANSLATION

At the time when the Jews were trying to make people disbelieve in Muhammad came the Message of God:

"Those, who make others disloyal to Prophet Muhammad and make them swear falsely, will get the wrath, not the love of God on the Day of Judgement and they will suffer terribly".

I, Omar bin Bashirah Al'Khaldi, have received an order from the Governor of Penang forbidding all Muslims, Arabs, Kelings, Bengalis and others to join the Chinese Secret Societies because it is evil. It causes trouble and murder and the country is in disorder and the people live in fear. So those who are not members of the Secret Societies are asked to swear to be loyal to the ruler of the country. They are not to disobey (the) law. If they do so they are going against God and against their king. They will suffer in the world as a result of God's punishment. Therefore they must swear with all their heart and soul not to join any Chinese Secret Society and to be loyal and helpful to the ruler when there is trouble:

Muslims who join any Chinese Secret Society are disloyal Muslims and they are no longer Muslims for several reasons:



1. They are willing to leave and forsake their parents and relatives because they are so loyal and faithful to the Secret Society. This is against the teachings of Islam as mentioned in the Holy Koran.

2. Before being members, they swear by drinking blood and wine. Islam forbids this.

3. They are so loyal to the Secret Society that they are prepared to give all they have, including their lives, for the sake of victory and glory. This is against the teachings of Islam.

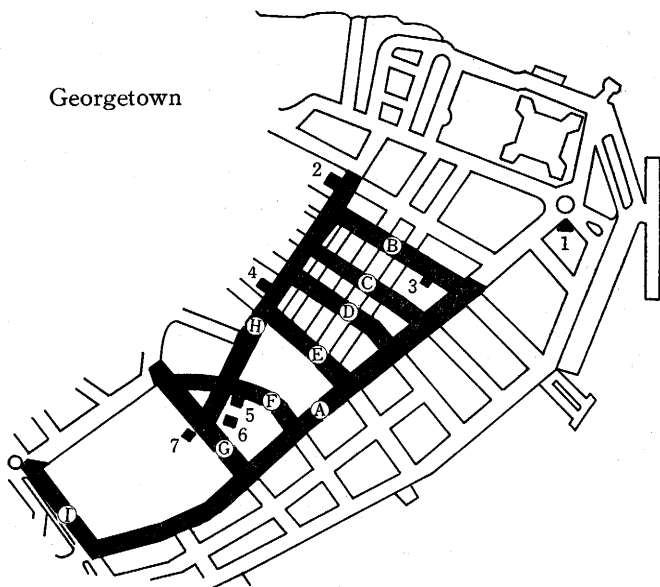
An unfaithful Muslim who does not repent cannot be buried amongst Muslims when he dies and he cannot be bathed and put in the coffin as done to other Muslim corpses. His property can only be returned to him when he becomes a faithful Muslim again. When he is alive other Muslims cannot go to his feasts and marriages of his descendants and when he dies they cannot visit his house and cannot visit him often when he is ill. He cannot join the mosque congregation unless he repents.

図1—F注

- |                              |                |
|------------------------------|----------------|
| 1. Administration centre     | Ⓑ Church St.   |
| 2. St. George's church       | Ⓒ China St.    |
| 3. Ghee Hin headquarters     | Ⓓ Ujiong Pasir |
| 4. Captain Kling mosque      | Ⓔ Chulia St.   |
| 5. Toh Peh Kong headquarters | Ⓕ Armenian St. |
| 6. Khoo Kongsi               | Ⓖ Acheen St.   |
| 7. Acheen street mosque      | Ⓖ Pitt St.     |
| Ⓐ Beach St.                  | Ⓘ Prangin Rd.  |

图 1-F

Georgetown



東洋文化研究所紀要 第百六册

图 2 J-1

